

「高校での実践」

2018年4月、神奈川県立高校から依頼をいたしました。校長先生との面接に伺いました。高校にはブレインジム体験会で伺ったことがあります、継続的な指導は、それまでに経験がありませんでした。しかし、考えてみれば、公立小学校の特別支援教育で関わった子ども達は、現在、高校生や大学生の年齢になっているわけです。そのことに想いを馳せて、6月から月に1回の計画で高校生とブレインジムを実践しました。

この高校では、以前に、スクールプロジェクトとして、インストラクター数名と共に、体育館での体験会を実施したことがあります。当時は、職員の方々と生徒の皆さんに異なっていても、県立高校としての役割に立たれ、日々教育に携わっている先生方のお手伝いができたら、また、生徒の皆さんに自分の特性に気づき、自ら、

その良さを肯定できるためには、どのような支援が必要なのか、ということを課題とした、メンターとしての職務での1年間の勤務でした。

この勤務も、私にとって新たな形の学校支援となりました。

当然のことですが、高校は義務教育ではありません。これまでの私の勤務は小学校でしたので、学区の良さと課題は違いますが、世の中の縮図の如く、様々な家庭で育てられた多様なキャラクターの子ども達が在籍していたわけです。大きな意味で考えれば高校も同じなのでしょう。

しかし、入試という門を通過してきた高校生の意識は異なります。中学校までは違う学校選択で入学しているわけですから。

私は初心に返って、生徒の皆さんと向き合い、必要とされている支援を模索していきました。高校は、言うまでもなく、学区

堀 弘子(神奈川県)



ケイ・マックキャロル先生を迎えて特別講座開催 2019.6/15・16

6月15日(土)と16日(日)に予定されている講座で講師を務めるケイ・マックキャロルさんは、自身の学習に対する困難さをブレインジムに出会って克服したと聞いています。カイロプラクターの学びを進め資格を取り、現在でも人間のみならず動物のカイロプラクターとして活動しています。そして、創始者のポールさんから直接、彼独自のアプローチを学んだ後は、イギリスにブレインジムを広げる活動をずっとしています。

ブレインジム手引書(2010年改定版・日本未発売)の中で、ケイさんはブレインジムエクササイズの一つであるアルファベット・エイトを10歳児のクラスに指導していました。ケイさんの2日間の特別講座では、ブレインジムエクササイズを知り、その理解をさらに深めることができます。



▲前列左から二人目 ケイ・マックキャロル先生

35周年を迎えたブレインジム(イギリス)
イギリスでブレインジムの35周年を祝う集会がありました。講演者は成人や学校、特別支援の領域での活動経験からブレインジムについて語り教えました。これからさらに発展するために、ブレインジムの26のエクササイズを教える新しく誕生した講座を広めていき、この素晴らしいブレインジムワークの新しい理解を広めています。

ケイ・マックキャロル

豊田 裕子さん(大阪府)

Q) 現在はどんな活動をされているのでしょうか?

発達が気になる子どものための発達支援教室 habita を個人で運営しながら児童発達支援事業所の指導員としても仕事をしています。療育の要所要所に教育キネシオロジーの考え方を取り入れています。普及活動としては大阪南部の同期インストラクター4人で結成している「ブレインジムカンパニー・アイビー」で自主開催の講座や自治体などの各種団体様からご依頼の講座を行ったりしています。3人寄れば文殊の知恵の言葉通り、それぞれの得意を生かしてお互い補い合いながら楽しく活動しています。

Q) 将来の展望は?

発達支援の仕事は身体の続く限りやっていくと思っていました。その根底には教育キネシオロジーがあり、子どもたちへのセッションと保護者・支援者などの必要とする大人の人たちへ伝えることが自分のライフワークです。この仕事を通じて得られる人の出会いも、とても大切なものです。



リサ・アン・デ・ガルシア(アメリカ)

が働くために運動システム、コア、筋肉と姿勢が十分に発達しているべきだということは、先生方にも一般の方にもほとんど認識されていません。しかし、経験豊富な先生は、どの児童が勉強に苦労するかを指摘することができます。通常は、筋緊張が低い子どもでバランスが悪く、多分、鉛筆を握る力は弱いでしょう。

筋肉、運動、筋緊張。これらは全て、後に学校生活で困難さを持つかもしれないことを示す合図です。学校生活では、追視のために視覚システムに、聴くためには聴覚システムに頼る必要があります。

(訳者より: motor systemを運動系ではなく運動システムと訳しました。「運動系motor systemとは神経系のうち、全身の運動に関わる部分をいう」(Wikipedia))

(*「姿勢入力」とは、「姿勢筋から脳に伝わる情報のこと」とリサさんから説明を受けました)

『ブレインジムがあるから大丈夫!』

Q) 豊田さんのブレインジムとの出会いは?

息子に発達課題があり、学校で大変苦労していました。それまでも身体的アプローチで発達を援助するものの存在を知っていましたが、遠すぎたり大変そうだったりで、もっと何か彼が少しでも楽になるものがないだろうかと探していました時に、ネット検索でブレインジムを知りました。

2014年に体験会に参加したのが最初です。その時に「これは面白い!」と思い、清水の舞台から飛び降りる気持ちで101講座を申し込みました。その時にDLRを使ってのバランス調整で大きな変化を感じ、これはすごいものだと実感しました。最初はそれで終わるつもりだったのですが、そこで出会う人たちが魅力的な方ばかりで、講座を楽しんでいるうちにインストラクターまでたどり着いてしまいました。(笑)

息子については体験会で習ったPACEを家に帰ってすぐに「どうもいいものらしいから一緒にやろう」と言って二人で始めました。元々几帳面な息子の性格のお陰で1年間ほぼ毎日続けることができ、その中であまりしゃべらなかった息子がPACEをしながら自分のことを色々語るようになり、気が付くと随分とバランスがとれてきました。マルチタスクでパニックになりそうなときも色々言ってなだめるのではなく、「とりあえずアップとポジティブポイント!」ということで収まることがあります。

とんどで、その後は自分で勝手に解決してしまい、「あれこれ考える前にとりあえず身体を動かす」ということに本当に助けられています。

動くことが学習の入り口を開けてくれる

「子どもの脳の発達」

あなたのお子さんやクライアントは、学校生活での行動や学業に問題がありますか?

私たちが思い出して明確にしておきたい最初のことは、学校生活とは感覚体験であるということです。読書をする時には、両目を動かしてページの上に何があるかを知覚し、自分の周りにあるものも見なくてはなりません。先生が言うことも聞く必要があります。教室の中の物にも触る必要が出てきます。座っている椅子から落ちたり、他の児童にぶつかったりしないように、空間のどこに自分がいるかを知っているべきなのです。ですから、学校生活がうまくいくためには、かなり感覚システムが発達している必要があります。

「私たちが覚えている必要があることは、『感覚入力を知覚するためには、傷ついていない運動システムが必要である』ということ。なぜなら、他のシステムは姿勢入力(*訳注参照)を頼りにしているから。」Dr. Robert Melilloの言葉

のこと、両目が何を見ているか、聴覚や触覚、全てのシステム